

古典文法トレーニング 長文課題 品詞分解と現代語訳

大問一（出典：『閑居友』）

◎品詞分解（非活用語は初出のみで、名詞は基本的に非表示。同色の助詞は同内容であることを示す。）

昔、賢ク・体き人ありラ変・用過去・終き。未副た家ラ変・用過去・体にありけるとシク・用とき、いみじく小鳥格助サ変・用接助ハ四・用過去・体格助を愛して飼ひけるが、一籠ヤマラに山雀ラ下二・用二つ入れたりける存続・用過去・体接助（偶然）に、一つ格助（体修）の山雀係助は、ものも食係助ハ四・未接助は、常副には籠係助の胸はらにつカ四・用きて、籠格助ダ下二・未意志・終格助副助サ変・用の目より出でむ紅とのみして、瘦サ下二・用ラ四・用せ細りて水副助（擬推）だにも多ク・用係助マ四・未くは飲マ四・未まて、出でむサ変・体とする営副みのほ副（呼）か、さら副にことわざなし。いま一つ副の山雀、ものいみじく食マ四・用ラ四・已存続・終ひて、身サ下二・用も肥え太りてぞありける過去・体（係結）。さるほど副に、この瘦存続・体せたる山雀、いたく身サ変・用も細りて、い疑かがしサ変・用完了・用過原・体たりけむ、籠係助の目より抜カ下二・用ダ下二・用け出でて、飛バ四・用びて去りぬ。これマ上二・用を見て、その主係助の男、されラ変・已接助（順推）ば憂ク・体き世意志・終を出でむマ四・未と営マ四・未まむ人も、さるラ変・体当然・体断定・用係助丁（作し態）べきにこそ侍助丁（作し態）る（※1）め推定・已れ。常接頭ラ四・用にうちしめりて、高ク・用き笑サ変・未打消・用ひもせず、心副助思ハ四・未ひにも係助ラ変・体適・体懸な推定・已ども食係助ラ変・体適・体懸はてこそあるべラ四・用かめれラ四・用と悟りて、やがて頭サ四・用下ろして、いみじく行シク・用ハ四・用ひて侍丁（作し態）り。

※1…本来ならば「主」からの敬意であるが、その場合、敬意の対象を想定できない。この本文のの前後を読むに、「尊き聖」の言を別の「聖」が引いて語っている箇所とわかるので、これは語り手の聖が聞き手に対して敬意を表明するために付け加えたと考える。

◎現代語訳（↓『ステップアップノート30 古典文法トレーニング』参照）